

平成30年7月豪雨と

能島城

—「かけら」が語る災害の記憶—

◆会期：2021.6.5(土)→8.22(日)

★月曜日休館(8月9日(月)は開館し、翌10日が休館)

◆会場：今治市村上海賊ミュージアム2階企画展示室

◆観覧料：無料(常設展示観覧の場合は有料)

◆問合せ：今治市 村上海賊ミュージアム

愛媛県今治市宮窪町宮窪 1285 番地 電話 0897-74-1065

村上海賊ミュージアムは、能島城跡（国指定史跡）の保存整備と利活用、そして調査研究を行っています。能島（周囲約850m）と鯛崎島（周囲約250m）の二つの島全体をお城にした全国的にも珍しい構造で、よく「海城」と呼ばれています。14世紀頃から活発に利用され始め、16世紀の終わり頃に廃城になったとされます。長年にわたる発掘調査では、海賊たちが使ったであろう生活容器がたくさん発見されました。ただし、完全な形のまま出土するのは珍しく、そのほとんどが「かけら」の状態で見つかります。



左の写真は、能島城の北側の船だまりと呼ばれる海岸で「拾った」もの。土器や建物などの壁に使った土の塊が多いなか、ツヤツヤした緑色の陶磁器がひときわ目立ちました。これらを船だまりで採集したのは2019年3月のことです。



同じ頃に行われたこの船だまりの上にある二之丸（郭（くるわ）II）の発掘調査でも、たくさんの土器や陶磁器が出土しました。出土品はすべて村上海賊ミュージアムに持ち帰り、まずはスタッフに洗浄をお願いし、一つ一つかごに並べて乾かしてもらいます。（あいかわらず、たくさんモノが出る城だな。珍しいものはないかな？）

ならべてみるか。

ほらね、そっくり…



!!!



わあ、くっついた！

じつは出土品のかけらがくっつくことはよくありますし、遺跡から出土する土器などは、だいたいバラバラになっているので、「接合」という作業を経て、形が復元されていきます。しかし今回びっくりしたのは、それぞれのかげらが発見された「位置」です。なんと、高低差が15メートル以上ある船だまりと二之丸で発見されたかけらがくっついたのです（奇跡?!）。その後の作業でもう一つのかげらがくっつき、さらに大きくなりました!。

小さなかけらだと器の種類や産地、時代などを判別するのも難しくなりますが、大きくなればなるほど、さまざまな情報を読み取ることができます。口縁（こうえん）や高台（こうだい）と呼ばれる部分が残っていると、器の直径など、大きさを復元することもできるんですよ。「あ、この部分のかげらなんだ」と。

この皿は、中国の龍泉窯（りゅうせんよう）というところで作られた「青磁」（せいじ）で、表面には蓮（はす）の花弁のような模様があります。しかも花弁は少し浮き出るように立体的で丁寧なつくりで仕上げられています。

この蓮の花弁のような模様のことを私たちは「蓮弁文（れんべんもん）」と言いますが、時代が新しくなるにつれて、蓮弁が立体的なものから、細い線だけで描かれる



ものに変化していくという特徴があります。詳しくは述べませんが、これらの特徴を現在の研究に照らし合わせると、この青磁の皿は14世紀代のものではないか、と推測することができます。14世紀といえば村上海賊が活躍し始めた頃。そして能島が活発に利用され始めた時期にあたります。その頃に中国龍泉窯で作られた青磁の皿が海を渡り、やがて能島城にもたらされたということがわかるのです。

ところで、能島城跡の海岸では、今でも土器や陶磁器のかけらが落ちていくことがあります。ほとんどが長い年月、波打ち際を漂い、砂で磨かれて角が取れて丸くなってしまっています（一つ一つが大切な文化財なので拾っても持って帰らないでくださいね）。でも、先ほどの青磁の皿の一片は船だまりで採集されたにもかかわらず、角も取れていませんし、貝もついていません。それは、いったいなぜでしょうか。

その背景には悲しい事情がありました。その理由は長い年月そこにあつたのではなく、ごく最近、砂浜に流れ出したものだからなのです。

2018年7月の西日本豪雨。能島城跡は、長時間続いた豪雨によって本丸西側、船だまり南側（右写真）、鯛崎島北側の斜面が大きく崩落しました。



船だまり南側斜面の崩落はすぐ上の二之丸縁辺にもおよび、郭（くるわ）（城の平坦な面）を形作っていた盛土の一部が流出してしまったのです。総雨量400mmを超える豪雨は、能島城跡のみならず、周辺の大島や伯方島の至るところでも大規模な土砂災害を引き起こしました。

被害の状況を調べて、適切な復旧の方法を考えるためには発掘調査が不可欠でした。能島城跡は国指定史跡であり、瀬戸内海国立公園特別地域内にありますので、これ以上の損壊を招くことなく、さらに景観や環境にも十分に配慮した方法が求められます。

「かけら」が摩耗していないこと。そして二之丸と15メートル下の海岸で拾った「かけら」がくっついたということ。これらのことは、もともとは二之丸にあった「かけら」が、土砂とともに海岸に流れ出てしまったという事実を示しています。



このように海岸に流れ出てしまった土器や陶磁器は、そのままにしておけば砂で研磨されて角が丸くなり、もともとの形や模様が少しずつ失われてしまいます。そこで、流出した遺物（土器や陶磁器など）をできる限り「レスキュー」することにしました。レスキューした遺物は3000片以上。青磁皿の一片はその中にありました。その他にも能島城跡では新発見のものや、奇跡的に全く割れていない土器の皿なども。

「出土状況」（いつ、どこで、どのように使われたかや、そのモノが発見された層や建物の痕跡などの年代などを知るための情報）という大事な情報を失ったかけらたちですが、豪雨の記憶を語り継ぐためにも大切に保存し、最大限に活用していかなければなりません。この企画展では能島城跡の被災と復旧の記録、そしてレスキューされた遺物を展示し、史跡の歴史的価値と保護の重要性、そして防災、減災について皆さんとともに考えたいと思います。

（今治市村上海賊ミュージアム学芸員）

本文は、村上海賊ミュージアムスタッフブログ「#おうちでバリミュージアム」（2021年5月5日・6日掲載）の記事をもとに作成しました。



日本遺産村上海賊
公式 Twitter